

左記の内容で発表を申込みたく存じます。

記

所属・氏名

皇學館大学大学院文学研究科神道学専攻博士後期課程二年  
新田恵三

題目

三輪田高房の鎮魂伝授について

要旨

本発表では三輪田高房自筆の日誌資料等を用いて「三輪田高房の生涯」、「鎮魂伝授の記録」、「鎮魂伝授のその後」という観点から高房の行った鎮魂伝授の現代的な意義を考察する。

三輪田高房は文政八年（一八二五）伊予国久米郡久米村に鎮座する日尾八幡宮祀官三輪田清敏の次男として生まれる。高房の生涯は大きく四つの時期に区分される。第一期は幕藩体制下で松山藩の儒者として儒学を教授した時期で、第二期は維新後神官教導職を兼務した時期で、第三期は神宮教院、神宮教、神宮奉斎会の教師として活動した時期で、第四期は晩年職を辞し、隠居の身となった時期である。没年は明治四十三年で享年八十五歳であった。

高房による鎮魂伝授は明治十九年から同二十六年にかけての七年間程に集中している。この頃既に六十代の老齢で明治二十二年八月には神宮教を辞職しており（明治二十六年五月以降は神宮教院改正に伴い復任している）、伝授はあくまでも個人的なものであったようである。受伝者は高房身辺の神宮教関係者を始めとして全国各地の神職など多岐にわたっている。さらに高房は明治二十五年七月、『大八洲雜誌』巻之七十三に「神につかへ奉る人たちにつぐ」と題した鎮魂行事を紹介する文章を投稿しており、以降鎮魂に関わる問い合わせが増加している。

高房が鎮魂行事を伝授した中に当時神宮教に勤めていた叶真吉という人物がいる。森津倫雄『石上神宮の鎮魂祭』所収の「自修鎮魂式相傳覺書」によると叶真吉はその後昭和九年二月十八日、三輪田高房より伝えられた鎮魂行事を石上神宮宮司森津倫雄に伝授している。

現在、神社神道では神道行法として禊祓行事と共に鎮魂行事が道彦制度によって全国的に行われているが、鎮魂行事は石上神宮に伝えられた法式が採用されている。つまり神社神道で行われる鎮魂行事の由来を遡れば本発表で述べた三輪田高房が行った鎮魂伝授にたどり着くということになるのである。

以上